

## 時報こと始め—先人は何を伝えたかったのか？—



矢 後 夏 之 助

代 表 取 締 役 社 長

エバラ時報で創立100周年記念号を出すということで、その巻頭言の執筆を依頼されましたが、入社以来、時報に文章を寄せたことも無く、発行された時報が送られてくる立場になってからも、真剣に読むことも無かった身ですから、何を書いたものかと思案に暮れてしまいました。そこで、イントラに創刊号から最新号に至るまで電子媒体化されたものが掲載されているという情報に基づいて、早速ネット・サーフィン（全部に目を通すわけではなく、飛ばし読みです）を始めました。創刊号では当時の島山一清社長が、「エハラ時報発刊に際して」という巻頭言を寄せて、何故技術報を発刊することになったか、その意図について語っています。多少私の解釈を加えて紹介させてもらおうと、若い技術者に自らの技術成果について文章の形で発表させて、同僚・上司の論評的とし、技術者として鍛え上げるという目的があったようです。自ら纏めさせ、仲間から率直な質問を受けさせ、それに答えさせることで、頭の中を整理する習慣をつけさせ且つ伝え方を学ばせることが、技術者を育てる上での要であることは昔も今も変わらないようです。同時に、ともするといがみ合う傾向のある設計と製造という部門間の壁を越えて、相互理解を深めさせようという意図もあったようで、初期には、製造部門から寄せられた報告が少なからずみられます。技術は設計と製造が相まって発展していくべきものという思想が色濃く出ています。また、「実態公開」と称して、失敗を生かして将来の進歩につなげるように、設計或いは製造上の失策・不良を公開させて、関係者で議論する機会を与えることも意図していたようです。これは、失敗を個人のものとし、失敗の

事実とその解決策をしっかりと記録として残し、同様な間違いを防ごうという目的があったように思われます。この三つの“創刊の意図”を念頭に置いた上でその後の掲載内容について、俯瞰してみると、創刊の年である1952年（私は1歳でした）から70年代初頭までは、新製品を紹介するとともに、新しい技術（殆どは欧米からの技術情報に基づいて荏原が自己消化に挑戦していたもの）を研究し紹介する文章が多いことに気がつきます。戦中に欧米に遅れをとったことを素直に認めて追いつき追い越せという気概にあふれています。また、販売しているポンプについて総纏めをして、今で言う技術カタログに相当するものも掲載しています。加えて、その市場予想に関する報告まで行われています。社内にとって貴重であることは言うまでもありませんが、社外の第三者にとっても貴重な情報が満載となっています。本来であれば社外秘とするような内容にも触れているのは、若い技術者の研鑽の場とし、部署を越えて技術を共通理解させ、失敗とその解決策を記録するという創刊の目的を十分に果たすものであったと思います。日本では風水力機械に関わる技術力が比類なきレベルにあり、追いかけるのは欧米だけだという強い自負心が、社外への情報公開もためらわなかった理由だと推測します。この時期は、題目に本邦最大或いは東洋最大という言葉が目立ちます。皆が、世界一を目指して仕事をしていたという雰囲気が伝わります。

70年代の初めに、明らかにその内容及び求められる質に変化が見られます。文章の冒頭に英文の“Abstract”が記載され、記事の最後に“参考文献”が記載され、“学

術論文”の体裁をとってきます。それと時を同じくして、流体の特性或いは材料腐食について論じた、基礎研究に類する論文も掲載されるようになっていきます。70年以降に、研究部門が独立した機関として置かれ、研究所としての体裁を整えていく中で、応用部門中心から基礎研究も含めた技術報に形を変えて行ったものと思われる。風水力機器単体から離れて、それを中核としたプラントの設計・施工に関わる報告が掲載されるようになったのもこの時期です。また、この時期に海外出張報告に類するものも多く掲載されています。海外出張がまだ一般的ではなかった時代ですから、その貴重な経験を文書化しておこうという目的があったようです。85年前後から、構造改革の一環として新製品の開発・市場投入という機運が全社で高まり、新製品の開発及び納入に関わる記事が増え、伝統のポンプに関わる記事の掲載が、汎用製品を除いて明らかに減少傾向を示しています。その後は精密・電子事業の新製品及び環境エンジニアリング関係の新しいプラントの完工を紹介する記事が主流を占めることとなります。風水力機械については材料、振動或いは騒音といった基礎研究分野の記事とポンプシステム案件に関わる記事だけが掲載されるという状況になっています。経営が、風水力分野から成長を期待した新分野に力を入れているため、新分野に関わる技術者が意気軒昂に掲載記事を増やしていったということでしょう。国内に記録的な大きさのポンプが求められなくなったということもありますが、世界一を目指していたはずの風水力分野の技術陣が、意気消沈していたというのも事実のようです。経営の舵取りの難しさを如実に表した事実だと思えます。この傾向は、その後2000年代の初めまで続きますが、2009年以降は、総合研究所を廃して開発の主力を各事業体に移し製品開発に軸足を移した結果、基礎研究に関する論文が殆どなくなり、風水力機械、環境及び精密電子の各事業別に新製品及び技術の紹介及び解説的な

記事が増えてきます。この傾向は若い技術者に自らの技術成果について語らせ、その情報を事業遂行に関わるすべての分野（営業から始まって調達、製造及びサポートアンドサービスまで）で共有化するのに役立っており、創刊の意図の二つは依然として満足できていると思います。一方で“できた、できた”と明るい部分を強調することに主眼が行って、失敗とその対応を記録するという最後の目的だけはどうも実現できていないように思えます。失敗こそが、会社の財産ですから、おそれと社外に公開できないという現実を理解できますが、失敗を記録化して社内に公開するための手段についても一度考えてみる必要があると思います。また、総合研究所を廃した後に、基礎研究の部分を補完する為に、大学或いは公的な研究機関と産学連携体制を強化してきたという事実があります。その部分における記事が見られない為、“基礎研究はどうなっているの？”，“将来が不安だ”という声も聞かれます。今後は大学との連携による成果を記録として残す作業が開始されることを期待しています。

この記念すべき私の第一報を書き上げる過程で、過去のエバラ時報の記事・報文は質・量とも豊富であることを実感し、荏原の技術力の高さを再確認できました。これからは時報が届くたびに、創刊の意図を思い返ししながら、建設的な批評家になろうと思います。

最後に、途切れることの無いエバラ時報の発行に尽力されてきた、またされている編集委員及び事務局の皆さんに感謝の言葉をささげて本稿を終わらせたいと思います。

蛇足ですが、若い皆さんへのメッセージです。「技術の世界では、二番を目指しては、二番にはなれません。一番を目指す心意気と努力が肝心であり、結果は（大事ですが）二の次でもよいのです。（本当は一番輝く金メダルが良いけれど!!!）」